

生涯設計のための女子教育に関する研究

A Study on female education for a life design

戸田 里和
Satowa Toda

大妻女子大学人間生活文化研究所
Institute of Human Culture Studies, Otsuma Women's University

キーワード：女子大学生，生涯設計，キャリア教育
Key words : Women's University student, Life design, Career education

1. 研究目的

2019年4月，働き方改革関連法案の一部が施行された。生産年齢人口が減少する中，働き手としての女性像が求められている。しかし，女子学生の将来に対するビジョン意識は男子学生に比べ低く，依然として専業主婦への憧れや出産を機とした退職を希望するなど，生涯働きたいというビジョンが乏しい状況にある。女子学生は，男子学生に比べ人生のライフイベントが多く，結婚・出産・育児などがもつ将来のライフキャリアやワークキャリアへの影響が大きく，その結果，将来のビジョンを描くことが難しい状況にあると推測される。また，就職活動時には「今まで自分がしてきたこと」「現在自分が取り組んでいること」「自分の将来ビジョン」を問われることも多く，将来ビジョンの回答に困窮する女子学生像も想像に難くない。それゆえ，女子学生の社会的・職業的自立に向けた教育支援は急務であり，女子学生の将来設計力を向上させるためのキャリア教育の必要性が示唆される。

本研究は，女子大学生（以下，女子大生）が何を“大切”と捉えているのかという「過去・現在・未来」の視点の自由記述とキャリア意識を用いて探索的に検討し，教育指導と支援の方策を探るための基礎資料を得ることを目的とする。

2. 研究実施内容

1) 調査時期および対象者

2019年4月，関東圏にある2つの女子大学に在籍する学生にインターネット調査を実施した。回収数225票，うち記入漏れ，記入ミスを除い

た1年生180票を分析対象とした。

2) 調査項目

(1) 属性：学年と所属（職業がある程度限定される学科と限定されない学科を分類するため）を尋ねた。

(2) 自由記述：下村（2009）¹⁾を参考に，過去，現在，未来について「大切なこと」を自由記述で回答を求めた。「これまでの私にとって大切だったことは...」「今の私にとって大切なことは...」「これからの私にとって大切なことは...」に続く文章について回答を求めた。

(3) キャリア意識：キャリア意識という概念は多様な捉え方があるが，本研究では，就職活動に関連したものに限定した。それゆえ，下村ら（2009）²⁾によるキャリア意識の発達に関する効果測定テスト（キャリア・アクション・ビジョン・テスト：CAVT）を採用した。同尺度は，将来に向けてどの程度熱心かつ積極的に行動しているかを測定する「アクション」6項目と将来に向けてやりたいことなどをどの程度明確にしているか，またはそれに向けて準備しているかを測定する「ビジョン」6項目の合計12項目で構成される。本調査では，「かなりできている」(5)～「できていない」(1)の5件法とした。

3) 分析方法

集計・分析には，KH Coder（樋口，2014）³⁾，IBM SPSS ver25を用いた。文章完成法課題に対する自由記述量（文字数）に焦点を当て量的分析を行った後，キャリア意識の高低によって，過去，現在，未来の自由記述内容に違いがある

のかを検討し、下村 (2009)、田澤・梅崎 (2017) 4) の先行研究と比較した。

4) 成果

(1) 量的検討

過去、現在、未来、に女子大生が何文字程度で記述したのかを検討した。その結果、平均文字数は過去、現在、未来の順に $M=13.20$, $M=15.94$, $M=18.57$ であった (表 1)。過去、現在、未来の平均値には統計的に有為な差がみられ、文字数は、過去<現在<未来の順となった。

表 1. 過去・現在・未来の文字数の平均等

	平均値	標準偏差	最小値	最大値
過去	13.20	13.46	0	113
現在	15.94	13.34	0	75
未来	18.57	14.98	0	116

先行研究と比較すると、下村 (2009) の示した大卒社会人の平均文字数は過去、現在、未来の順に $M=7.22$, $M=7.57$, $M=8.47$ 、田崎・梅崎 (2017) の示した大学 3 年生の平均文字数は $M=9.20$, $M=10.66$, $M=11.06$ 、であり、本結果が最も多かった。

下村 (2009) によれば、女性のほうが自由記述の量が多いことを示し、その解釈として心理学全般で指摘される女性の言語能力や表出性の高さであるとしている。本研究で社会人全体や就職活動開始時期の 3 年生 (男性 915 名：女性 2,056 名) の平均よりも上回る記述量が得られたのは、同様の理由と解釈できる。

次に、回答文字数の分布を確認したところ、過去、現在、未来の回答の傾向は類似していた。2 字熟語を複数組み合わせるケース「家族と友達」や、20 文字以上の長い記述「勉強をおろそかにせず交友関係を広げて社会勉強をすること」などがみられた。

(2) 質的検討

キャリア意識(CAVT)の下位尺度ごとの平均値はアクション $M=17.23$ 、ビジョン $M=19.16$ 、であり、両尺度の平均値には、統計的に有為な差がみられた (アクション<ビジョン)。また両尺度には、有為な正の相関がみられた ($r=0.48$, $p<.01$)。

先行研究と比較すると、田崎・梅崎 (2017)

の 3 年生の平均値は、アクション $M=18.39$ 、ビジョン $M=18.19$ 、であり、3 年生に比べアクション平均値は低く、ビジョン平均値は高ことが示された。3 年生のビジョン平均値に対し、1 年生がそれを上回ったのは、何らかの資格取得が目的である女子大生は、就職活動開始時期の 3 年生よりもビジョンが明確であったと推察される。

また、両尺度の分布を確認したところアクションは正規分布である一方、ビジョンは右に偏った分布であった。それゆえ平均値と中央値を基準にし、アクション高・ビジョン高群、アクション高・ビジョン低群、アクション低・ビジョン高群、アクション低・ビジョン低群の 4 群を設定した (表 2)。

表 2. キャリア意識の高低による度数と割合

	度数	%
アクション高・ビジョン高	63	35.0
アクション高・ビジョン低	28	15.6
アクション低・ビジョン高	35	19.4
アクション低・ビジョン低	54	30.0

キャリア意識の高低による自由記述の違いを検討するため、アクション高・ビジョン高群 (以下、高群)、アクション低・ビジョン低群 (以下、低群) の文字数の平均値には、統計的に有為な差がみられた (表 3)。文字数は、高群>低群であった。

表 3. 過去・現在・未来の文字数平均の比較

	過去	現在	未来
高群	14.94	16.05	19.35
低群	10.56	12.93	16.76

次に、高群・低群の自由記述データを用いてそれぞれの特徴を示す。

過去について、高群の頻出語は「友達」「自分」「部活」「関係」「人」の順であった。一方、低群は「勉強」「人」「大切」の順であった。

現在について、高群の頻出語は「勉強」「自分」「将来」「大学」「人」「友人」「友達」の順であり、「友人」と「友達」を同じ意味として統一すると「勉強」と同じ第 1 位となった。一方、低

群は「自分」「勉強」「大学」の順であった。

未来について、高群の頻出語は「自分」「人」「将来」「行動」「勉強」の順であった。一方、低群は「自分」「人」「行動」「持つ」「将来」の順であり頻出語の傾向は類似していた。

過去、現在、未来の自由記述では、キャリア意識の高低にかかわらず、全ての時制において「自分」が多く用いられていたのは田澤・梅崎(2017)と同様の結果であった。両先行研究は、安定的な者ものほど自由記述量が少なく、不安定な者ほど多いことを示したが、本研究では、キャリア意識の高い者ほど記述量が多いことが示唆された。この結果の解釈としては、問題意識の明確化に加え、過去の「部活」経験や、現在の「友達」との関係などにみられる活動範囲・交友関係の広さに違いがあると考えられる。

また、未来については、高群低群とも頻出語の傾向は類似していたが、「人」や「行動」は異なる用いられ方をしていてと考えられたため、共起ネットワーク分析を行い語と語の結びつきを探ることとした(図1,2)。

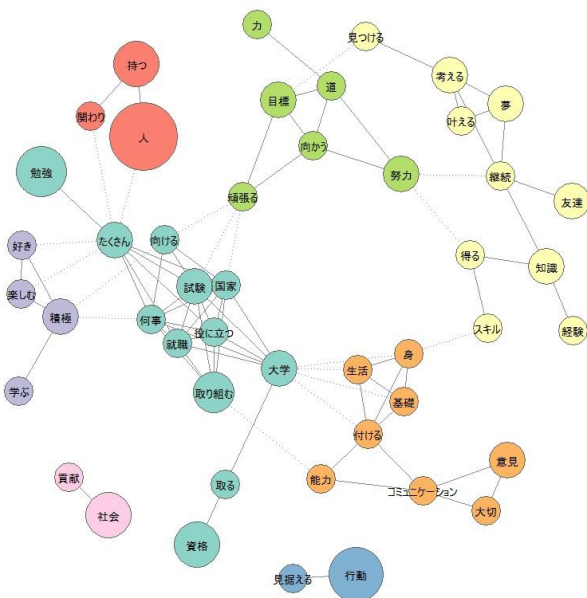


図 1. 意識高群・未来の共起ネットワーク図

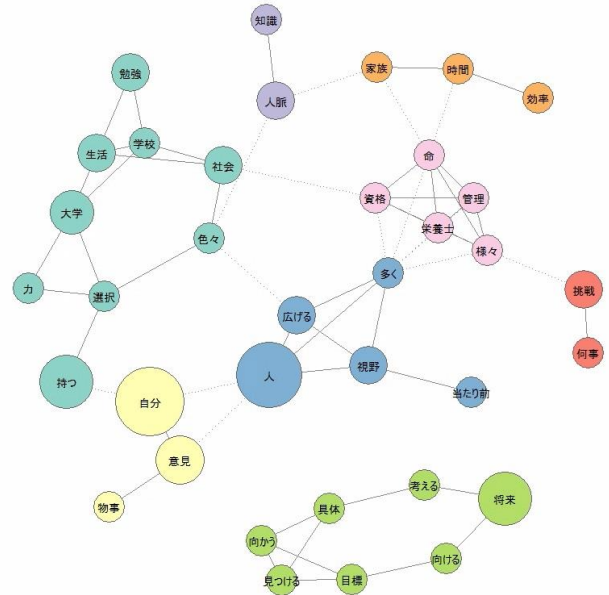


図 2. 意識低群・未来の共起ネットワーク図

3. まとめと今後の課題

本研究は、女子大生が何を「大切」と捉えているのかという「過去・現在・未来」の視点の自由記述とキャリア意識を用いて検討した。記述量に焦点を当てた量的分析とキャリア意識の高低によって、過去、現在、未来の記述量や内容に違いがあるのかなどを先行研究と比較しながら考察した。その結果、文字数は、過去<現在<未来の順となり先行研究と同様の傾向を示した。また先行研究では、社会的な地位や立場などが不安定な者ほど記述量が多いことを示したが、本研究では、キャリア意識の高い者ほど記述量が多いことが示唆された。

本研究の成果は、2019年11月、日本キャリア教育学会において「時間的展望とキャリア意識：女子大1年生の自由記述とCAVTを用いた検討」という題目で発表した。現在も本データからコンセプトを取り出し分析ならびに考察を深めている。今後も本研究を継続して得られる成果は、女子学生の将来設計力を向上させるためのキャリア教育に活かしていきたい。

参考文献

[1]下村英雄(2009)「フリーターの自由記述—フリーターは過去、現在、未来について何を書くのか—」白井利明・下村英雄・川崎友嗣・若松養亮・安達智子『フリーターの心理学—大卒者のキャリア自立—』世界思想社, pp.128-160.

[2] 下村英雄・八幡成美・梅崎修・田澤実 (2009) 「大学生のキャリアガイダンスの効果測定用テストの開発」『キャリアデザイン研究』5, pp.127-139.

[3] 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析 —内容分析の継承と発展を目指して—』 ナカニシヤ出版

[4] 田澤実・梅崎修 (2017) 「キャリア意識と時間的展望—全国の就職活動生を対象にした自由記述分析—」『キャリア教育研究』35(2), pp.47-52.

4. この助成による発表論文等

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成 (R1902) を受けたものです。

学会発表

[1] 戸田里和, 時間的展望とキャリア意識: 女子大1年生の自由記述とCAVTを用いた検討, 日本キャリア教育学会 第41回研究大会, 2019年11月, 長崎大学文教キャンパス (長崎県)